



# 弘大農学生命科学部 同窓会会報

第40号

令和4年5月発行  
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会  
TEL 0172-36-2111  
FAX 0172-39-3750  
振替 02340-7-564  
印刷 (株) 笹 軽 印 刷





## ごあいさつ

同窓会長 高谷 清孝

同窓生の皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。また、佐々木長市学部長をはじめ学部関係者、学部後援会、地域の関係者の皆様には、同窓会の運営にご支援・ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

長引く新型コロナウイルスの感染拡大により、日常生活への影響は依然として続いておりますが、その一方で、ワクチン接種も着実に進んでいることから、コロナ禍からの1日も早い脱却と、弘前市を代表するさくらまつりやねぶたまつりなどが、以前のように多くの観光客を迎えて盛大に開催されることを願っています。

さて、農学生命科学部は、その前身である農学部が、昭和30年7月に当時の文理学部から独立する形で創設され、その後、平成9年度に理学部生物学科が農学部へ移設されたことに伴い農学生命科学部へと改称され、さらに、平成28年度には現行の5学科に再編成されて今日に至っています。

一方、同窓会も、農学部が創設された翌年（昭和31年）5月に、会員相互の親睦を図るとともに学部の発展に寄与することを目的として設立され、現在では、同窓会報の発行や学部校内整備への協賛、卒業祝賀会の共催などの事業に取り組んでいます。

このような中で、農学生命科学部におきましては、弘前大学が掲げる「地域連携・地域貢献」や「世界への挑戦」の基本理念の下、地域や時代の要請に応じて食産業に貢献できる人材や、国際的

な視野を持って活躍できる人材等の育成に積極的に取り組まれ、我が国の農業をはじめ地域産業の発展に大いに貢献されておられます。これからも地域をけん引する役割を担われることをご期待いたします。

同窓会としましても、これまでに8,500名近い学部卒業生等によって、青森県内はもとより全国各地に同窓会支部が設置されておりますので、このネットワークを更に充実させ、支部間の連携強化を図りながら、学部の発展に寄与して参りたいと考えています。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、令和元年度から卒業祝賀会へ参画できないなど、一部事業の実施に支障を来す事態が続いておりますが、可能な限り学部や学生の支援に努めながら同窓会活動の活性化に取り組んで参りますので、皆様には今後ともご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

また、皆様からのご意見や支部同窓会・会員の活動状況などの情報提供につきましてもよろしくお願いたします。

末筆ながら、皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



## 農学生命科学部の近況

農学生命科学部長 佐々木 長 市

同窓会ならびに関係の皆様には、平素より学部に対するご協力等をいただき心より感謝申し上げます。地域貢献が地方大学の大きな使命であるとの認識がますます高まり、地域から必要とされるより良い大学及び学部づくりには同窓生各位のご協力は欠かせないことと思っております。

新型コロナウイルス感染症拡大とその対策のため、本年度も保護者不参加という入学式及び卒業式となっております。大学の講義は、幸いにして三密を避ける環境での対面授業を実施することができました。しかし、年明けからは再びメディア授業となりました。コロナ感染症の世界的な流行で、学生の「海外研修入門」という科目の中止や、海外からの留学生の受け入れ中止など、これまで経験のないことが2年連続でおこりました。青森県は、本年3月に入ってから多数の感染者が発生し、国のコロナ蔓延防止法などが適用されております。最近の国内外の情勢は収束傾向となっておりますが、まだまだ本県は油断できない実情です。大学では、コロナ予防接種の3回目をこの3月に教職員及び学生に対し実施しております。会員の皆様も、コロナ感染症対策に配慮した生活の中、この会報を手にはしていると思います。経済的な状況も不透明ですが、学部への温かいご支援と叱咤激励を重ねてお願い申し上げます。

令和3年度は学部改組後6年目になり、昨年4月からは、初めての卒業生が社会に出ております。学部でのこれまでの教育が、社会より評価さ

れることとなります。令和3年度の就活も、一昨年同様これまでの会社訪問という形からコンピューター利用の遠隔面談などが取り入れられ、この形態が広がりつつあります。また、最近は在宅勤務など就労形態も変わりつつあります。学生は若いのでこの変化に柔軟に対応しているようですが、弊害も危惧されております。昨年の後期の入試は、倍率も低下しかつ応募者数が激減して苦慮しておりました。しかし、今年度は仙台会場での入試の実施などの改革を行い、倍率と応募者数は回復しております。同窓会の皆様のご協力に大いに感謝しております。

令和2年度からは、全学の協力で「地域共創科学研究科」が発足しました。本学部の食品関係教員と農業経済関係の教員が新しくできる研究科に移り学生の教育研究に取り組んでおります。また、農学生命科学研究科も地域の社会実装をよりよく知る講義を皆様の協力のもとに実施しております。今年度も昨年度と同様に、卒業式後の祝賀会が新型コロナウイルス感染症対策のため中止となりましたが、寄付金は学部の活動に広く支援される形で使用したいと考えております。

今後とも同窓生の皆様の変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のご健勝とご活躍を祈念しております。

## 豊川好司名誉教授 瑞宝中綬章受章

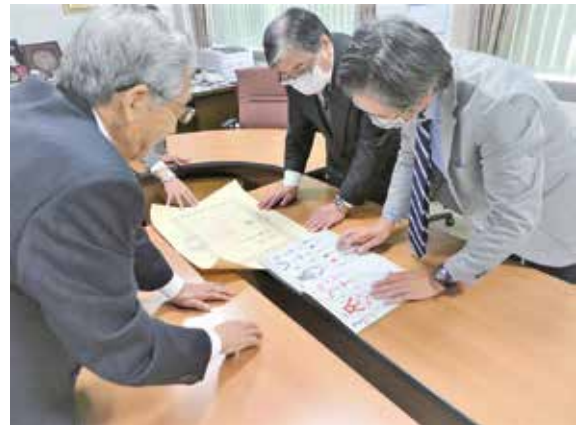
令和3年秋の叙勲が発表され、元農学生命科学部長の豊川好司名誉教授（2006年3月にご退官、当時農業生産学講座）が瑞宝中綬章を受章されました。豊川名誉教授は本学を退職後、放送大学青森教育センター長、弘前医療福祉大学初代学長、さらに青森県教育委員会委員長などの要職をお勤めになり、「地方教育行政功勞」による瑞宝中綬章を受章されました。

これを受け、令和3年12月10日（金）に豊川名誉教授が佐々木農学生命科学部長に受章の報告においでになり、勲記等を披露いただきました。

当日は、佐々木学部長をはじめ吉田副学部長、石川副学部長、加藤事務長も同席し、豊川名誉教授からの勲記及び勲章についての説明に聞き入り、最後に記念撮影が行われました。



勲記及び勲章



勲記や勲章について説明している様子



(左から) 石川副学部長、佐々木学部長、豊川名誉教授、  
吉田副学部長、加藤事務長

## 定年退職教員からの寄稿



## 弘前での出会いと研究

国際園芸農学科 荒川 修

農学部園芸学科果樹園芸学講座の助手として1986年6月に着任して以来、主にリンゴを材料として研究と教育を行ってきました。弘前はリンゴの研究には大変恵まれた環境でしたが、リンゴの研究を始めて続けることが出来たのは、多くの人との偶然の出会いがあったからです。そもそもリンゴの着色の研究を始めたのは、山形大学で出会った果樹の先生の示唆によるものです。当時は栽培が増加し始めた‘ふじ’の着色が問題になり、その理由を解明するための基礎研究を始めました。この研究テーマとの出会いがその後の研究人生を導いてくれました。

博士課程に進学した東北大学では、リンゴ果実の光応答の研究のために出会った植物の光応答の研究者に指導を受け、国際的なジャーナルに論文を出すことが出来ました。そしてこの論文が弘前大学や海外の研究者との出会いをもたらしました。

弘前大学での出会いは、なんと言ってもリンゴの研究を行っていた菊池先生や浅田先生、さらに農場の塩崎先生です。当時は小講座制でしたが、助手だから講座の雑用をしようというわけではなく、むしろ一緒に研究・教育を行いながら学ぶことも多く、また必要な時には3人分の研究費をまとめて使わせてもらって研究を進めることが出来ました。また、剪定技術研究会などを通じてリンゴ農家に会い、実際の栽培の問題を聞いたり、様々な場面で研究成果を話したりする機会を得ました。そして藤崎町のリンゴ農家の人と一緒にJICAのウズベキスタンのリンゴ栽培技術向上支援プロジェクトを実施し、交流と留学生の指導を行うことに繋がりました。

カリフォルニアでモモの着色の研究を3ヶ月間行いましたが、これは学部内でアメリカの研究者に紹介されたからです。学会で出会ったタイの研

究者とは、ライチーとマンゴーの着色に関する共同研究を行うためにタイにも滞在しました。そしてチェンマイ大学からは博士課程の留学生を受け入れ、その後、交流協定を締結して現在の交流に至っています。さらに世界最大のリンゴ生産国である中国からは、リンゴの研究を希望する学生を受け入れました。修了後に大学で勤務している人を介して交流協定を締結し、現地に行った時にはリンゴ園地などを案内してもらいました。また、研究のために機器を借用して出会った学部・学科内の先生方とは、一緒に新しい研究を行うことが出来ました。職員組合や大学生協を通じて出会った学部外の教員とも共同研究を行い、海外のリンゴ産業の調査に一緒に行きました。

大学は研究の場ですが、研究とは常に新しいことへのチャレンジです。そのためには、教員でも学生でも等しく自由に考えやってみることが大事です。自由な発想と失敗が許されるのが大学の本来の姿ですが、最近は残念ながらその自由が狭められているように感じます。レクレーションや飲み会などの自由な交流の中から思いがけない偶然の出会い・発想も生まれます。コロナ禍のために交流する機会が減っていますが、卒業生・修了生も弘前大学で学び生活したことが何か新しい出会いをもたらしたことを願っています。



## 定年退職教員からの寄稿



## ブナ林生態系で過ごした思い出深い11年

白神自然環境研究センター 石川 幸 男

東日本大震災の驚きが冷めやらぬ2011年3月24日に北海道から弘前に引っ越し、ホームセンターやコンビニの商品棚に半分程度しか品物がない状態で、この地での生活が始まりました。弘前大学白神自然環境研究所に着任早々始まった白神での植物群落や年輪の調査に駆け回っているうち、瞬く間に時間が過ぎてこの春に定年退職を迎えました。当初の研究所は、2018年から農学生命科学部附属の白神自然環境研究センターに組織替えになったので、本学部の一員としての時間はわずか4年間でしたが、生き物主体の調査研究、教育を行うことから当初から本学部とは関係が深く、折に触れて皆様とご一緒にすごさせていただきました。協力教員や運営委員の皆様を中心とした各学科、事務の皆様には大変にお世話になりました。まずは心から感謝申し上げます。

東京の下町で生まれたものの、地球温暖化を避けるべく24歳で北海道に退避して、当時に盛んになっていた森林動態に関する生態学的研究に首を突っ込んで以来、2000年代の初頭まで近隣諸国も含めて北方天然林の調査を続けていました。その間、知床世界自然遺産の調査にも関わりましたが、白神自然環境研究所の一員となれたことには、世界遺産での経験も買われた部分があったものと思います。本会報37号でもお知らせしましたように、世界自然遺産としての白神山地は、グローバルな環境変動に直面している北半球冷温帯のモニタリングサイトとしての価値がユネスコからも認められていることから、そのサイトの設定に取り組みました。また、年輪調査の技術を活用して、ブナを始めとした白神の主要樹木が温暖化や地表変動によって受ける影響を検討することができました。さらに、生物標本の収集保管事業についても、センター同僚の中村剛之准教授、山岸洋貴助教と

もに忙しいと同時に楽しく取り組み、ブナ林生態系を満喫した11年間でした。

こうしたフィールド仕事をこなすたびに、弘前大学の恵まれた立地条件を感じます。白神山地だけでなく、八甲田山、十和田湖、津軽半島の湖沼群などに1時間もあればアクセスできて、ありのままの生物的自然の森羅万象を体験、調査できることは、この地の大学ならではのメリットです。研究センターであったことから学生とのかかわりは少なかったものの、実習、卒研のお手伝いなどで現場と一緒に踏みながら彼らの成長を見るたびに、フィールド力（ふいーるどりょく：野外活動がもつ、コミュニケーション力や忍耐力などの人格を養う効果、および個人が持っているそうした性質。檜垣大助先生と私の造語）の効能を実感し、そこに弘前大学の可能性があると思ってきました。農学生命科学部はその中核を担う学部であることから、こうしたフィールドを今以上に活用した教育研究のさらなる進展を期待しています。

退職後は北海道に戻り、知床関連の仕事などに関わる見込みですが、弘前に顔を出す機会もありそうですので、その節にはよろしくお願いたします。最後になりますが、学部の皆様、同窓会の皆様の益々のご健勝、ご発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。



## 定年退職教員からの寄稿



## 山野の草木に戯れた日々の果て

食料資源学科 赤田辰治

弘前大学農学生命科学部附属遺伝子実験施設の4階にある教員研究室からは八甲田の遠景が良く見えます。そして、それに連なる里山と津軽平野を一望のもとに見渡しながらか、私はその日の仕事にとりかかります。やがて同じ東の空に登る月を見てはその日の収穫が何であったかをがやがやと反省する、そんな月日が流れ流れて今、30年余りの研究生活が終わりを告げようとしています。これで一巻の終わりとはよく言ったもので、続きの第二巻はどうなるのか、それが目下最大の関心事ではあるものの、今一度忘れてしまいそうな日々のエピソードを拾い集めてみようと思います。

平成5年の夏が終わる頃、私は初めて弘前の地を踏んだ…とりたいところですが、実は父の郷里が青森市にあり、中学生の頃には叔父に連れられて百沢のスキー場を訪れたこともありました。ともあれ、故郷を離れた父に代わって息子が帰郷するという奇遇をもって、弘前での教員生活が始まりました。時に、遺伝子実験施設は文部省からの設置許可が下りたばかりであり、しばらくは農学部育種学研究室に居候の身。いつの間にか研究室にとけこみながらも、やがて出来上がるべき新設の建物を図面から思い描く日々でした。

研究面ではポストドク時代からの継続でダイズの紫外線防御に関わる遺伝子の研究を進めていました。そんなある日のこと、朝日の眩しい新設の研究室にときの施設長がぶらりと来訪され、「白神山地のブナをやらないか」と提案されたのが一

つの大きな転機となりました。爾来、ダイズに加えてブナが研究対象となり、やがてヤマモミジとシロツメクサがこれに加わることとなりました。これではとても収拾がつかないという心配はさらさらなく、それぞれに秘められた謎解きに年月も忘れ、わくわくすることばかりの研究生活を満喫してきたことを、ご指導・ご協力いただいた皆さまと歴代の卒業生に感謝するばかりです。

一事が万事、まるで見境もなく研究対象・研究テーマを増やして来ましたが、ブナが地球温暖化の影響を受けていることや、ヤマモミジが何故秋に紅葉するか、シロツメクサのよつ葉を生み出す遺伝子は何かなど、自然界の疑問に引き寄せられる習性は「白神のブナ」の提言により感化されたのかも知れません。

残念ながら未だに何一つ判然とした解明がなされてはいませんが、これまでにそれぞれの研究テーマに関わって来た卒業生には少なくともそれぞれの疑問が生きており、やがて目を見張るような世界が明らかになることを祈念しています。「家宝」は寝て待てと言っては叱られそうですが、



## 令和3年度卒業生・修了生の卒業式ならびに就職・進学先

令和4年3月23日に、令和3年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は210名、大学院修士課程修了生は42名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は8,473名、研究科修了生は1,295名となった。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年と同様に卒業・修了生だけが出席する学位記授与式となったが、式典の様子はオンラインでライブ配信された。卒業・修了生には学部に戻り学位記が手渡されたが、全体での記念写真撮影や祝賀会兼同窓会歓迎会等の催しは、残念ながら全て中止となった。卒業生にとっては、少し雰囲気異なるこの巣立ちの日がより記憶に残るものであることを期待するとともに、今後のご活躍を祈念する。

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。（令和4年3月25日現在）



### 生物学科

(株) アーク、(株) アサンテ、(株) アドバンスドシステムテクノロジー、(株) サングリン太陽園、(株) ホープス、(株) DCM、(株) イオン北海道、(株) ウエルシア薬局、札幌市職員、日本ハム北海道ファクトリー、北海道開発局、林野庁、弘前大学大学院 (13)、大阪大学大学院

### 分子生命科学科

青森県職員 (2)、(株) ひたち農園、(株) ベイシア、(株) みちのく銀行、(株) 青森ダイハツモーターズ、(株) オカムラ食品工業、(株) カメイ、(株) トーアエイヨー、(株) ヤマダイ、厚生労働省、国立大学法人北海道大学、社会保険診療報酬支払基金、(株) 小野田ケミコ、青森県警察、青梅市職員、(株) 中外製薬、(株) 日本フードパッ



カー、(株)日本原燃分析、弘前大学大学院(16)、東北大学大学院(4)、東京大学大学院

#### 食料資源学科

(株)ユニバース(2)、(株)伊藤ハムデイリー(2)、(株)日糧製パン(2)、(株)USEN-NEXT HOLDINGS、(株)ゼンショーホールディングス、(株)デンコードー、(株)伊藤軒、(株)会玉屋、(株)青森銀行、(株)東北フジパン、(株)日本デザイン、(株)柳月、(株)ジャパニクス、(株)トヨタネ、(株)トリックス、なめがたしおさい農業協同組合、(株)ドライフーズ、(株)ミドリオートレザー、(株)旭印旭川中央青果、伊達市職員、一般財団法人青森県薬剤師会 食と水の検査センター、(株)郡中丸木、(株)紅屋商事、札幌市職員、(株)秋田プリマ食品、青森県警察、(株)石屋製菓、全国農業協同組合連合会 宮城県本部、全国農業協同組合連合会 長野県本部、(株)天龍木材、都城農業協同組合、(株)東部トップツアーズ、東北地方整備局、(株)日本フードパッカー、(株)日本電設工業、(株)八戸缶詰、北海道職員、弘前大学大学院(11)

#### 国際園芸農学科

青森県職員(3)、ホクレン農業協同組合連合会(2)、(株)オヤマ、(株)オン・ザ・プラネット、(株)グリーンハウス、(株)ササキコーポレーション、(株)ツルハ、(株)ハチカン、(株)モリタン、(株)サンマモルワイナリー、(株)TOKYOフレッシュ、(株)yts、(株)サミット、(株)タムラファーム、(株)フロントディール、みやぎ生活協同組合、(株)ヤマト科学、海上保安庁、(株)紅屋商事、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構、青森県警察、青森県農業協同組合中央会、青森市職員、地方独立行政法人青森県産業技術センター、(株)東亜非破壊検査、東北農政局、北海道職員、北海道信用農業組合連合会、北海道農業協同組合中央会、由利本荘市職員、弘前大学大学院(5)、東北大学大学院、北海道大学大学院

#### 地域環境工学科

青森県職員(4)、青森県土地改良事業団体連合会(3)、(株)竹中土木(2)、(株)Kプロビジョン、(株)アイナポホールディングス、(株)アルト技研、(株)タカヤ、(株)ネクスコ・エンジニアリング北海道、(株)ノジマ、(株)ワールドインテック、(株)鴻池組、(株)三幸ランドコンサルタント、(株)三幸ランドプランニング、(株)復建技術コンサルタント、(株)共和ハーモテック、(株)三谷建設、青森市職員、仙台市職員、(株)中央コンサルタンツ、東北農政局、(株)富士急行、北海道警察、(株)北海道旅客鉄道、弘前大学大学院

#### <大学院農学生命科学研究科修了生>

##### 生物学コース

(株)アウトソーシングテクノロジー、(株)イナリサーチ、(株)セラク、(株)NECソリューションイノベータ、(株)キオクシア、札幌市職員、(株)日本フードパッカー、北海道職員、林野庁、岩手大学大学院(4)

##### 分子生命科学コース

(株)ニプロ(2)、(株)ジャパン・ディッシュ・エンジニアリング、(株)十文字チキンカンパニー、(株)村田製作所、(株)ひろさきLI、(株)マルヨ水産、(株)よつ葉乳業、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、(株)前澤化成工業、(株)北海道糖業、岩手大学大学院(2)

##### 食料資源学コース

(株)WDBエウレカ(2)、(株)シバタ医理科、(株)メロディアン、(株)宮十造園土木、(株)千葉製粉、学校法人岩手医科大学、岩手大学大学院

##### 国際園芸農学コース

青森県職員、岩手大学大学院

##### 地域環境工学コース

(株)エイト技術、愛知県土地改良事業団体連合会

## 事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号(2005年6月1日発行)の10ページにあります。

同窓会ホームページ(<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)からもダウンロードできます。

## 新任教員の自己紹介



高野 涼 助教（国際園芸農学科）

令和3年10月1日付けで農学生命科学部国際園芸農学科に着任いたしました、高野涼と申します。専門は農村社会学で、これまで農村の暮らしや地域資源管理に関する研究などを行ってきました。今後は、これまでの研究

をさらに発展させるとともに、青森県の地域に根差した研究を行っていきたくと考えています。至らない点もあるかと思いますが、本学ならびに地域の発展に貢献できるよう精一杯取り組んで参りますので、どうぞよろしくお願いたします。



矢田谷 健一 助教（地域環境工学科）

令和3年11月に着任いたしました、矢田谷（やたや）と申します。泉完名誉教授から指導を受けて本学大学院修士課程を2006年3月に修了し、民間企業と地方自治体での勤務を経て、この度の着任となりました。

主な研究対象は、河川等の横断構造物に設置される“魚道”です。河川は、人間が水資源を享受する上で不可欠な存在ですが、同時に多様な生物の生息・繁殖の場でもあります。弘前という素晴らしい地で、先輩方が培ってこられた伝統を継承し、教育と研究に邁進する所存です。



藤井 祥 助教（生物学科）

本年2月1日に着任しました、藤井祥と申します。植物生理学が専門でして、特に葉緑体の分化を支えるメカニズムを探究しています。分子生物学や脂質・色素の生化学的解析、色素体ゲノムに関する顕微鏡解析、バイオイ

ンフォマティクス等を組み合わせ、色素体が姿を変える仕組みを紐解くことを目指しています。自身の研究を発展させるとともに、大学や地域の発展にも貢献して参りたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。



## 教職員人事

令和4年2月1日

藤井 祥 (ふじい しょう)

助教 (生物学科)

退職 (定年退職) 令和4年3月31日

荒川 修 (あらかわ おさむ)

教授 (国際園芸農学科)

石川 幸男 (いしかわ ゆきお)

教授 (白神自然環境研究センター)

赤田 辰治 (あかだ しんじ)

准教授 (食料資源学科)

退職 (辞職) 令和3年9月22日

正木 卓 (まさき すぐる)

助教 (国際園芸農学科)

(転出先: 酪農学園大学 准教授)

採用 (新任)

令和3年10月1日

高野 涼 (たかの りょう)

助教 (国際園芸農学科)

令和3年11月15日

矢田谷健一 (やたや けんいち)

助教 (地域環境工学科)

昇任

令和3年4月1日

西野 敦雄 (にし の あつお)

教授 (生物学科)

令和3年4月1日

田中 和明 (たなか かずあき)

教授 (食料資源学科)

令和3年4月1日

松山 信彦 (まつやま のぶひこ)

教授 (食料資源学科)

令和3年4月1日

丸居 篤 (まるい あつし)

教授 (地域環境工学科)

令和3年4月1日

加藤 千尋 (かとう ちひろ)

准教授 (地域環境工学科)

令和3年12月1日

山尾 僚 (やまお あきら)

准教授 (生物学科)

## 会費納入と住所通知のお願い

同窓会費は、同封致しました「同窓会費納入のお願い」に貼付の振込用紙でお納めくださいますようお願い致します。

転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報ください。

### 同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

松崎 正敏 電話 0172-39-3804 E-mail mma@hirosaki-u.ac.jp

加藤 幸 電話 0172-39-3869 E-mail katoko@hirosaki-u.ac.jp

栗田 大輔 電話 0172-39-3592 E-mail dkurita@hirosaki-u.ac.jp

## 訃報

(2021年度中に事務局に連絡があった方)

加藤 弘道 元助教授 (旧 生物生産科学科)

後藤 孝人 様 (農地 昭和55年卒)

鳥潟 貢 様 (土肥 昭和43年卒)

水澤 隆平 様 (生物資源学科 平成29年卒)

上記会員のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 同窓生近況だより

### 高橋秀直先生を偲ぶ会

令和3年11月12日  
北海道札幌市 中村屋旅館

令和3年2月、北海道長沼在住の農家浜氏が高橋秀直先生ご逝去の報を親族より知らされました。浜氏は23回卒業生では毎年、自分の生産した「ゆめぴりか」を先生に送っていました。札幌圏在住の農業経済専攻の卒業生に呼びかけ、追悼の集いをうかがっていましたが、コロナの影響でまもなく11月、森氏（第26回生）の会場手配で実現となりました。昭和53年（第23回生）から昭和61年（第31回生）までの農業関係に携わる8名が集い、冒頭黙祷を捧げ、秀直先生の「悪夢？」のような学生時代に思いを馳せ、「経済学（マルクス原論）」や卒業論文にまつわる苦い思い出から、岸田政権の「新しい資本主義」まで話題は尽きることなく、しめやかにそしてにぎやかに偲びました。仲島氏（第31回生）など当日参加できなかった同窓生からもメッセージが寄せられ、年代の幅を拡大しながら次回の再会を誓い、散会となりました。



文責 松原（第29回生）

## 新企画

### 「弘大酒を囲んで同窓会！」

コロナウイルスの感染拡大で自粛モードが続いております。なかなか集まって同窓会を行える状況ではありませんが、きっとまた皆さんでお酒を囲める日が来ると思います。そして、同窓会や出身研究室の仲間との飲み会などを企画する時が来ましたら、是非、同窓会事務局にご一報ください。会の様子の簡単なご報告やお写真を会報誌にご紹介いただくことを前提に、弘大酒をお送りいたします。参加人数が5名様以上の時は1本、10名様以上の時は2本（最大2本まで）を幹事様宛に送らせていただきます。締め切りは設けておりませんので、まずは皆様の健康を第一に考え、この困難を乗り越えましょう。そして、落ち着きましたら、出身大学のお酒を囲みながら懐かしい話に盛り上がりましょう。お待ちしております！

連絡先 同窓会事務局（前ページ参照）

